

1/11 Sat.

第273回 土曜マチネーシリーズ
東京オペラシティ コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.273 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

1/12 Sun.

第273回 日曜マチネーシリーズ
東京オペラシティ コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.273 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

指揮
Conductor

ヴァイオリン
Violin

コンサートマスター
Guest Concertmaster

シャブリエ
CHABRIER

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

[休憩]
[Intermission]

ストラヴィンスキー
STRAVINSKY

小林資典 *-p.6*
MOTONORI KOBAYASHI

ヴァレリー・ソコロフ *-p.9*
VALERIY SOKOLOV

戸澤采紀 (ゲスト)
SAKI TOZAWA

気まぐれなブーレ [約5分] *-p.12*
Bourrée fantasque

ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品35 [約33分] *-p.13*
Violin Concerto in D major, op. 35
I. Allegro moderato – Moderato assai
II. Canzonetta : Andante – III. Finale : Allegro vivacissimo

バレエ音楽〈ペトルーシュカ〉(1947年版) [約34分] *-p.14*
Petrushka (1947 version)
I. 謝肉祭の日 –
II. ペトルーシュカの部屋 –
III. ムーア人の部屋 –
IV. 謝肉祭の日の夕方とペトルーシュカの死

1/16 Thu.

第678回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.678 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor

ヴァイオリン
Violin

コンサートマスター
Concertmaster

モーツァルト
MOZART

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

モンティ
MONTI

マスネ
MASSENET

ラヴェル
RAVEL

[休憩]
[Intermission]

ドビュッシー
DEBUSSY

小林資典 *-p.6*
MOTONORI KOBAYASHI

ネマニャ・ラドゥロヴィチ* *-p.9*
NEMANJA RADULOVIĆ

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

交響曲 第36番 八長調 K. 425 〈リンツ〉 [約26分] *-p.16*
Symphony No. 36 in C major, K. 425 "Linz"
I. Adagio – Allegro spiritoso
II. Andante
III. Menuetto
IV. Presto

我が母の教え給いし歌* [約4分] *-p.17*
Songs My Mother Taught Me

チャルダッシュ* [約5分] *-p.17*
Czardas

タイスの瞑想曲* [約5分] *-p.18*
Méditation from "Thaïs"

ツィガーヌ* [約10分] *-p.18*
Tzigane

交響詩〈海〉 [約23分] *-p.19*
La mer
I. 海の夜明けから真昼まで
II. 波の戯れ
III. 風と海との対話

1/21 Tue.

第644回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.644 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

上岡敏之 *-p.7*
TOSHIYUKI KAMIOKA
イーヴォ・ポゴレリッチ *-p.10*
IVO POGORELICH
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

ショパン
CHOPIN

ピアノ協奏曲 第2番 *ヘ短調 作品21 [約32分] -p.21*
Piano Concerto No. 2 in F minor, op. 21
I. Maestoso
II. Larghetto
III. Allegro vivace

[休憩]
[Intermission]

ショスタコーヴィチ
SHOSTAKOVICH

交響曲 第11番 *ト短調 作品103 (1905年) [約55分] -p.22*
Symphony No. 11 in G minor, op. 103 "1905"
I. 宮殿前広場
II. 1月9日
III. 永遠の記憶
IV. 警鐘

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社

1/26 Sun.

第139回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No.139 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮
Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

アラン・ブリバエフ *-p.8*
ALAN BURIBAYEV
反田恭平 *-p.10*
KYOHEI SORITA
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

ボロディン
BORODIN

歌劇〈イーゴリ公〉から“だったん人の踊り”
[約14分] *-p.24*

'Plovtsian Dances' from "Prince Igor"

プロコフィエフ
PROKOFIEV

ピアノ協奏曲 第2番 *ト短調 作品16 [約31分] -p.25*
Piano Concerto No. 2 in G minor, op. 16
I. Andantino
II. Scherzo: Vivace
III. Allegro moderato
IV. Finale: Allegro tempestoso

[休憩]
[Intermission]

プロコフィエフ
PROKOFIEV

バレエ音楽〈ロミオとジュリエット〉から [約36分] *-p.26*
Excerpts from "Romeo and Juliet"
モンタギュー家とキャピュレット家 第2組曲 第1曲
少女ジュリエット 第2組曲 第2曲
修道士ローレンス 第2組曲 第3曲
踊り 第2組曲 第4曲
別れの前のロメオとジュリエット 第2組曲 第5曲
ジュリエットの墓の前のロミオ 第2組曲 第7曲
仮面 第1組曲 第5曲
ティボルトの死 第1組曲 第7曲

※当初の発表から、出演者と曲目が一部変更になりました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：横浜みなとみらいホール

1/11

土曜マチネー

1/12

日曜マチネー

1/16

名曲

Maestro

指揮

小林資典

MOTONORI KOBAYASHI, Conductor



©読響

繊細かつ多彩な表現力 〈ペトルーシュカ〉〈海〉

豊かな知性と創造力を武器に本場ドイツの歌劇場で長く活躍する実力派が、〈ペトルーシュカ〉〈海〉などを振り、読響から鮮烈なサウンドを引き出す。

1974年千葉県生まれ。東京芸術大学および同大学院で指揮法をトラヴィス、遠藤雅古に師事。また、サントリーホール・オペラアカデミーに参加し、同ホールオペラ公演ではクーンらのアシスタントを務めたほか、二期会などの公演でも副指揮と合唱指揮を務めた。98年に平和中島財団奨学生となり、その後文化庁海外派遣研究員として渡独、ベルリン芸術大学でフスマンに師事した。

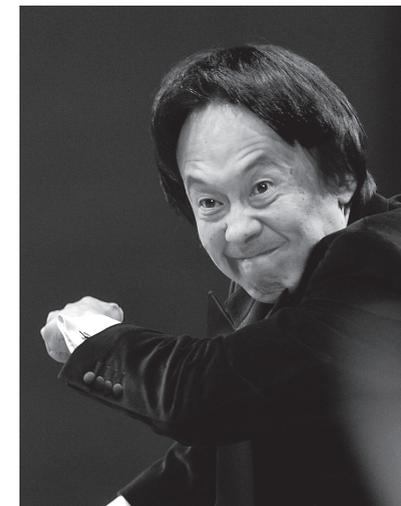
2000年からライン・ドイツ・オペラでコレペティートルおよび音楽アシスタント、通奏低音奏者も務める。08年、ドルトムント歌劇場の専属指揮者として契約し、13年から同歌劇場の音楽総監督代理と第1指揮者(カペルマイスター)の任にある。現在、ドイツの主要劇場において、第1指揮者以上の要職にある唯一の日本人指揮者として活躍。モーツァルト作品をはじめ、〈ばらの騎士〉〈アラベラ〉〈オテロ〉〈椿姫〉〈ファルスタッフ〉〈トリスタンとイゾルデ〉〈ピーター・グライムズ〉など多彩な演目で成功を収めている。

20年には、コンヴィチニー演出のオーベール〈ポルティチの娘〉(新制作)を指揮して注目を浴びた。23/24年シーズンは、ドルトムント歌劇場で〈ラ・ボエム〉〈天国と地獄〉を指揮したほか、ヴッパータール響などにも客演。日本では、18年に大阪響に客演して成功を収めたほか、19年にバレエ・アム・ライン日本公演の〈白鳥の湖〉で好評を博した。読響とは21年8月以降、共演を重ねている。

指揮

上岡敏之

TOSHIYUKI KAMIOKA, Conductor



©読響

鬼才・上岡 衝撃の〈1905年〉

ドイツを拠点に欧州で活躍し、音楽へ愛を注ぐ孤高の芸術家・上岡敏之が、シヨスタコーヴィチの交響曲第11番を振り、核心に迫る演奏を繰り広げる。

東京生まれ。東京芸術大学でメルツァーに指揮を師事し、作曲、ピアノ、ヴァイオリンも並行して学ぶ。ロータリー国際奨学生としてハンブルク音楽大学に留学、ザイベルに指揮を師事。キール市立劇場ソロ・コレペティートルおよびカペルマイスターとして歌劇場でのキャリアをスタートさせた。

これまでに、エッセン歌劇場の第1指揮者、ヘッセン州立歌劇場音楽総監督、北西ドイツ・フィル首席指揮者、ヴッパータール市立歌劇場音楽総監督、ザールラント州立歌劇場音楽総監督、ヴッパータール響首席指揮者、ヴッパータール市立歌劇場インテンダントなどの要職を務めた。ヴッパータール響とは2度の日本ツアーを行い、好評を博した。2016年から24年までコペンハーゲン・フィルの首席指揮者を務め、高い評価を得た。ケルン放送響、バンベルク響、バイエルン放送響、シュトゥットガルト放送響などに客演。また、ザールブリュッケン音楽大学指揮科正教授も務めている。

日本では読響のほか、N響、大阪フィルなどと共演し、16年から5シーズンにわたり新日本フィルの音楽監督を務めた。ホテルオークラ音楽賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞・特別賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。

読響とは1998年以降共演を重ね、ベートーヴェン、ブラームス、R. シュトラウス、マーラーなどを指揮し、多くの名演奏を残している。またピアニストとして《読響アンサンブル・シリーズ》にも度々登場。

1/21

定期

Maestro

指揮

アラン・ブリバエフ

ALAN BURIBAYEV, Conductor

俊英ブリバエフが紡ぐ
愛と悲しみの物語

©SimonvanBoxtel

カザフスタンの気鋭ブリバエフが、プロコフィエフのバレエ音楽〈ロミオとジュリエット〉などで、大編成のオーケストラから迫力のサウンドを引き出し、ドラマティックな演奏を披露する。

1979年、チェリストで指揮者の父とピアニストの母という音楽家一家に生まれる。カザフ国立音楽院を経て、ウィーン音楽大学でラヨヴィッチ教授のもと指揮を学ぶ。99年ザグレブのマタッチ国際コンクールで優勝して国際的な注目を集め、2001年コペンハーゲンのマルコ指揮コンクール特別賞（1位なし）、01年ペドロッティ国際指揮コンクールで第1位などを受賞した。

2004年から11年までドイツのマイニンゲン歌劇場の音楽監督を務めた。06年から11年までスウェーデンのノールショピング響、07年から12年までオランダのブラバント管、10年から16年までアイルランド国立響の首席指揮者を、14年から18年まで日本センチュリー響の首席客演指揮者などを歴任。現在はカザフスタンのアスタナ歌劇場の首席指揮者の任にある。これまでにライブツィヒ・グヴァントハウス管、バーミンガム市響、NDRエルプフィル、BBC響、サンクトペテルブルク・フィル、イェーテボリ管などを指揮するほか、近年はヘルシンキ・フィル、ロイヤル・フィルなどにも登場。リヨン国立歌劇場やフィンランド国立歌劇場にも客演し、〈イドメネオ〉〈フィガロの結婚〉〈魔弾の射手〉〈ホフマン物語〉〈サロメ〉〈イェヌーフア〉〈スペードの女王〉など幅広いレパートリーを指揮している。読響初登場。



ヴァイオリン

ヴァレリー・ソコロフ

VALERIY SOKOLOV, Violin

音楽への真摯な姿勢が欧米で確かな評価を得ているウクライナを代表する俊英ヴァイオリニスト。1984年、ウクライナのハルキウ生まれ。13歳で渡英し、メニューイン音楽院やドイツのクロンベルク・アカデミーでボヤルスカヤ、クレーメル、チュマチェンコらに師事。2005年にエネスコ国際コンクールで優勝して一躍注目を浴びた。これまでにアシュケナージ、ジンマン、ネルソンス、ネゼ＝セガン、ヴァルチュハ、マルツキら名匠の指揮で、パリ管、クリーヴランド管、NDRエルプフィル、ヒューストン響、BBC響、チューリヒ・トーンハレ管、フィルハーモニア管、バーミンガム市響などと共演している。エラート・レーベルなどからCDをリリース。読響初登場。

熱い演奏で聴衆の心をつかむ革命児。類いまれなるヴィルトゥオーゾで世界的な注目を浴びている。1985年、セルビア生まれ。ハノーファー国際コンクール優勝をはじめ、数々のコンクールで入賞。これまでにミュンヘン・フィル、フィルハーモニア管、ベルリン・ドイツ響、フランス国立放送フィル、モントリオール響、ニューヨーク・フィルなどと共演。カーネギーホール、ベルリン・フィルハーモニー、アムステルダム・コンセルトヘボウをはじめとする世界の著名ホールでリサイタルを行っている。録音も数多く、2015年にはドイツの権威あるエコー・クラシック賞を受賞した。2021年ワーナー・クラシックスと契約、これまでにアルバム『ルーツ』『ベートーヴェン』『バッハ』をリリース。読響とは2020年2月以来、3度目の共演。



©Sever Zolak

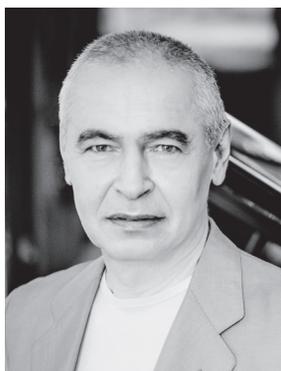
ヴァイオリン

ネマニャ・ラドゥロヴィチ

NEMANJA RADULOVIĆ, Violin

1/21
定期

Artist



©Andrej Grlc

ピアノ

イーヴォ・ポゴレリッチ

IVO POGORELICH, Piano

奇抜な解釈と演奏スタイルで超人的なスケールの音楽を生み出し、世界を震撼させる鬼才。1958年、旧ユーゴスラヴィアのベオグラード生まれ。12歳で単身モスクワへ渡り、モスクワ音楽院で学ぶ。80年ショパン国際コンクールに出場した際、個性的な演奏で審査員の評価が割れ、本選に進めなかったことにアルゲリッチが審査員を辞して抗議するなど一大スキャンダルとなり、世界の耳目を集めた。81年にニューヨークのカーネギーホールでデビューし、以降世界各地で公演を重ねている。ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、ロンドン響、シカゴ響など一流楽団と共演。録音も数多い。現在はクロアチア国籍で旧ユーゴ内戦後の慈善事業にも力を入れている。読響とは2016年以来、共演を重ねている。

1/26

横浜マチネー

Artist

2021年のショパン国際コンクールで第2位を受賞。クラシック音楽界に革命をもたらすカリスマ。25年8月にはザルツブルク音楽祭に指揮とピアノでデビューを果たす。モスクワ音楽院を経てショパン音楽大学で研鑽^{けんさん}を積み、ウィーンで指揮を学ぶ。12年、日本音楽コンクール優勝。15年、ロシア国際音楽祭でマリインスキー劇場にデビュー以降、ベルリン・ドイツ響、ロシア・ナショナル管、ワルシャワ国立フィル、RAI国立響や国内の主要楽団などと共演。自身が創設したジャパン・ナショナル・オーケストラで全国ツアーを開催するほか、新レーベルNOVA Recordを設立。20年にはウィーン楽友協会にデビュー。「情熱大陸」「徹子の部屋」「題名のない音楽会」など多くのメディアに出演。出光音楽賞受賞。読響とは18年以来、共演を重ねている。



©Yuji Ueno

ピアノ

反田恭平

KYOHEI SORITA, Piano

シャブリエ 気まぐれなブーレ

フランスの作曲家エマニュエル・シャブリエ (1841~94) が音楽家への道歩んだのは、ワーグナーのおかげである。幼少時に神童と呼ばれるほどの音楽の才能を示したシャブリエだが、両親の望みにより一族の職であった法律家への道へ進んだ。法学部を卒業後、内務省に就職したシャブリエは仕事のかたわら作曲を続け、作品を出版社に送り続けた。音楽家たちとも交流し、やがて親友となったデュパルクを通じてワーグナーの音楽に出会う。ミュンヘンでデュパルク、ダンディとともに楽劇〈トリストランとイゾルデ〉を聴いて生涯忘れられない感動を得たシャブリエは、作曲こそが己の天職であることを自覚し、1880年、39歳で役所を退職し、作曲に専念することになった。シャブリエをアマチュア作曲家とみなしていた友人たちは驚いたが、以後世を去るまでの14年の間に絵画的小品集や狂詩曲〈スペイン〉によって作曲家としての名声を確立した。

シャブリエはピアノのための小品を数多く残している。1891年に作曲した〈気まぐれなブーレ〉もそのひとつであり、これが生前に出版された最後のピアノ曲となった。曲は名ピアニスト、エドゥアール・リスラーに献呈されている。続いてシャブリエは管弦楽版の編曲に着手したが、編曲は途中で放棄されてしまう。作曲者の死後、管弦楽版を作ったのは、友人でありワーグナー指揮者として名高いフェリックス・モットル。モットルはシャブリエのオペラをくりかえし指揮して、ドイツ国内でシャブリエの名を高めることに貢献していた。以後もいくつか管弦楽版が作られているが、本日はこのモットル版が使用される。

ブーレとはフランス由来の2拍子の速い舞曲。小気味よくリズムカルな主題がユーモアを漂わせる。続く柔らかく官能的な曲想には、作曲者のワグネリアンとしての姿が垣間見える。幕切れは華やかだ。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1891年／初演：1893年1月7日（ピアノ原曲）、1898年3月27日（管弦楽版）、パリ／演奏時間：約5分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット4、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン）、ハープ2、弦五部

チャイコフスキー

ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品35

ピョートル・チャイコフスキー (1840~93) の協奏曲は、なぜか初演にまつわる苦勞が多い。ピアノ協奏曲第1番は初演者と目した盟友ルビンシテインに酷評された。チェロのための協奏的作品〈ロココ風の主題による変奏曲〉は初演者フィツェンハーゲンに無断で改訂された。そして、ヴァイオリン協奏曲は初演を依頼したアウアーに拒まれた。おまけにウィーンでのアドルフ・プロツキによる初演は、高名な評論家ハンスリックに「悪臭を放つ音楽」と酷評されてしまう。しかし、現在ではブラームス、ベートーヴェンに匹敵する最も人気の高いヴァイオリン協奏曲となっているのだから、新作の評価とは難しいものである。

作品の誕生に貢献したのは作曲者と親密な関係にあったヴァイオリニスト、ヨシフ・コーテク。1878年、コーテクはスイスのクラランで静養するチャイコフスキーのもとを訪れた。その際に持参したラロの〈スペイン交響曲〉に触発されて、チャイコフスキーは新たにヴァイオリン協奏曲の作曲にとりかかる。スコアの完成までは1か月足らずしか要さなかった。独奏ヴァイオリンの技法にはコーテクの助言を仰いだ。

第1楽章 アレグロ・モデラート〜モデラート・アッサイ 雄大でドラマティックな序奏に続いて、独奏ヴァイオリンが悠然と第1主題を奏でる。ひとしきり高潮した後、甘美で夢見るような第2主題があらわれる。

第2楽章 カンツォネッタ：アンダンテ カンツォネッタとは「小さな歌」の意。管楽器のみによる歌謡風の序奏に続き、独奏ヴァイオリンが物憂げな主題を奏でる。切れ目なく第3楽章に続く。

第3楽章 フィナーレ：アレグロ・ヴィヴァーチッシモ 爆発的な総奏に、躍動感あふれる民俗舞曲風の主題が続き、熱狂的なクライマックスを築き上げる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1878年／初演：1881年12月4日、ウィーン／演奏時間：約33分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ストラヴィンスキー

バレエ音楽〈ペトルーシュカ〉(1947年版)

このバレエの主人公は、命を吹き込まれた人形のペトルーシュカ。古来、生命を宿した人形の話は数多い。チャイコフスキーの〈くるみ割り人形〉、ドリーブの〈コッペリア〉、ディズニー映画でも知られる「ピノキオ」、ホラー映画「チャイルド・プレイ」等々。これらの物語において、人形とはつまるところ少年なり少女なりの人間自身を暗に示している。ペトルーシュカ(ピョートル、英語名ピーターの愛称)というありきたりな名前を持った人形の役どころは、恋に破れる哀れな道化役。つまり、どこにでもいるだれかの物語だ。

ディアギレフ率いるロシア・バレエ団のためにバレエ音楽〈火の鳥〉を作曲したイーゴリ・ストラヴィンスキー(1882~1971)は、〈火の鳥〉の最後の数ページを書き上げる段階で、続く題材として〈春の祭典〉を着想していたという。しかし、1910年、家族とともにスイスに赴いたストラヴィンスキーは、〈春の祭典〉の完成には長期間が必要だと感じ、これに取りかかる前に、まず一種のピアノ協奏曲のような作品を書いて「気晴らしをしよう」と考えた。曲を書いていると、ストラヴィンスキーの脳裏に、突如として操り人形の姿が浮かんだ。命を吹き込まれた人形が悪魔のようなアルペジオでオーケストラを苛立たせ、オーケストラはファンファーレの脅しで人形に対抗する。恐ろしい格闘の末に、人形は敗れ、哀れな姿で倒れる。人形の名前はなんと付けようか。そうだ、ペトルーシュカだ! ありふれた冴えない男が主人公だ。

まもなくディアギレフに〈春の祭典〉のスケッチの代わりに、作曲したばかりの〈ペトルーシュカ〉の音楽(後の第2場の原型)を聴かせたところ、ディアギレフは大いに気に入り、この曲をバレエに発展させるようストラヴィンスキーを説得した。気晴らしのピアノ協奏曲として構想された作品は、こうしてバレエ音楽へと姿を変えたが、当初の着想の痕跡がピアノの活躍に残っている。台本の作成にはアレクサンドル・ブノワの協力を得た。

バレエの初演は、1911年にミハイル・フォーキンの振付けにより行われた。1947年にストラヴィンスキーはオーケストラの編成を4管編成から3管編成へと縮小した改訂版を残している。本日演奏されるのはこちらの1947年版である。

第1場 謝肉祭の日 物売りが声を張り上げるようなフルートとともに、賑やかな市場の様子が描かれる。木管楽器が手回しオルガンを模す。小太鼓の連打とともに喧噪が止むと、魔法使いがフルートを吹いて、ペトルーシュカ、ムーア人、バレリーナに命を与える。人形たちは陽気にロシアの踊りに興じる。太鼓連打で次の場面に移る。

第2場 ペトルーシュカの部屋 人形部屋に投げ込まれたペトルーシュカ。寂しげなペトルーシュカのもとにバレリーナがやってくる。バレリーナに恋心を抱くペトルーシュカだが、まったく相手にされない。哄笑するような金管楽器に続いて太鼓が連打され、次の場面へ。

第3場 ムーア人の部屋 たくましいムーア人のもとにバレリーナがやってくる。やがてふたりはワルツを踊り出す。嫉妬したペトルーシュカがふたりの邪魔をしようとするが、逆にムーア人に追い出されてしまう。

第4場 謝肉祭の日の夕方とペトルーシュカの死 さまざまな旋律が入り乱れて市場の喧騒が描かれる。活発で色彩感あふれるクライマックスを迎えた後、トランペットの叫び声が聞こえる。ペトルーシュカはムーア人に追われ、剣で刺される。魔法使いが死んだペトルーシュカを担いで去ろうとすると、ペトルーシュカの亡霊があらわれる。おののいて逃げ去る魔法使い。弦のピツィカートで静かに曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲:1910~11年、1946~47年改稿/初演:1911年6月26日、パリ、シャトレ座(初稿)/演奏時間:約34分

楽器編成/フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3(バスクラリネット持替)、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、シロフォン、銅鑼)、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦五部

モーツァルト

交響曲 第36番 八長調 K.425 〈リンツ〉

1781年、大司教コロレード伯とおおげんかとなり解雇されたザルツブルクの宮廷音楽家ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)は、故郷を離れてウィーンに移住した。フリーの音楽家として活動を始めたウィーンでは作曲家、教師として仕事は順調、ピアニストとして出演する予約演奏会も人気で、1783年には前年に結婚した6歳年下の妻コンスタンツェとの間に長男が誕生する。7月末にそれらを報告するために妻とともに2年ぶりに帰郷した。

3か月に及んだザルツブルク滞在を終え、ウィーンに戻る途中、リンツに立ち寄ったモーツァルトは、トゥーン=ホーエンシュタイン伯爵邸にとりゅうし、当地での演奏会のために急遽、交響曲を作曲することになった。それが第36番〈リンツ〉である。モーツァルトの言葉によれば、わずか4日で一気に書き上げた。力強さと優美さを備えた交響曲は、数日で完成させたとは思えないほど、動機の取り扱いや主題の作り方など手が込んでいる。まずは、伯爵が所有する施設での私的演奏会で初演され、翌日に公開初演された。

第1楽章 アダージョ~アレグロ・スピリトoso 重たい付点のリズムを伴う荘重な序奏と、晴れやかで快活な、ソナタ形式の主部から構成される。

第2楽章 アンダンテ 緩徐楽章としては珍しくトランペットとティンパニが用いられ、第1ヴァイオリンが優美な旋律を歌い上げる。短調の響きも現れるが、深刻になることはない。

第3楽章 メヌエット 素朴ながらも華やかな舞曲。朗らかな中間部トリオは、ソロのオーボエとファゴット、弦楽合奏の編成となり、室内乐的な親しみやすさをもつ。

第4楽章 プレスト 長大で輝かしいフィナーレ。ソナタ形式で、第1楽章に匹敵する規模と構成をもつ。展開部では転調と模倣によって音楽に陰影をつける。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1783年／初演：1783年11月3日、リンツ／演奏時間：約26分
楽器編成／オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

ドヴォルザーク

我が母の教え給いし歌

チェコの作曲家アントニン・ドヴォルザーク(1841~1904)の作品は、いずれも旋律の美しさやのびやかな温かさにあふれている。彼の歌曲のなかで最も有名な〈我が母の教え給いし歌〉は、歌曲集〈ジブシーの歌〉(全7曲)の第4曲として書かれた。母が私に歌を教えてくれた頃、いつも涙を浮かべていたことを、私が子どもに歌を教えるようになって、同じように涙が落ちると思い出す、と子どもに向き合う母親の心情が歌われる。

この慈愛に満ちた美しい旋律の歌曲は、その後、20世紀前半を代表するヴァイオリニスト、フリッツ・クライスラー(1875~1962)によってヴァイオリンとピアノ用に編曲され、さらに広く親しまれるようになった。

モンティ

チャルダッシュ

イタリアの作曲家ヴィットーリオ・モンティ(1868~1922)は、ナポリの音楽院でヴァイオリンと作曲を学び、1886年からパリのラムルー管弦楽団のヴァイオリン奏者を務めた。パリではマンドリンの指導者として教本を出版し、数々の作品を手がけた。〈チャルダッシュ〉も、初めはマンドリン用の作品として書かれたが、やがてヴァイオリンなどでも演奏されるようになった。

全体は、ハンガリーの民俗舞曲チャルダッシュの形式に基づき、ゆるやかな「ラッサン」と急速な「フリスカ」から成る。まずは、ヴァイオリンが独特の節回しで歌い上げる。やがて情熱的な音楽となり、途中で長調に転じて重音奏法や倍音が浮き立つ特殊奏法が示され、再びテンポを上げて華やかな技巧で圧倒する。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

【我が母の教え給いし歌】作曲：1880年(歌曲集)／初演：1881年2月4日、ウィーン(歌曲集第1曲と第3曲)／演奏時間：約4分 楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(グロッケンシュピール)、ハープ、チェレスタ、弦五部、独奏ヴァイオリン

【チャルダッシュ】作曲：1904年／初演：不明／演奏時間：約5分 楽器編成／フルート、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、ハープ、弦五部、独奏ヴァイオリン

マスネ タイスの瞑想曲

めいそうきょく

フランスのジュール・マスネ (1842~1912) は、パリで成功を収めたオペラ作曲家。25作品以上のオペラを手がけ、〈マノン〉や〈ウェルテル〉がよく知られている。歌劇〈タイス〉(1894年初演)は、後にノーベル文学賞を受賞する作家、アナトール・フランスの同名の小説(1890)をもとに台本が作られた。舞台は古代エジプト。若き修道僧アタナエルは、享楽的な生活を送る美貌のタイスを信仰に導こうとするが、彼女の虜^{とら}になってしまい心が揺れ動く。

「タイスの瞑想曲」は、〈タイス〉の第2幕の第1場と第2場をつなぐ間奏曲として書かれた。今日ではオペラが上演されることは稀だが、独奏ヴァイオリンが優美な旋律を静かに歌い上げるこの曲は、広く愛奏されている。

ラヴェル ツィガーヌ

フランスのモーリス・ラヴェル (1875~1937) の〈ツィガーヌ〉は、ハンガリーのヴァイオリニスト、イェリー・ダラニーのために作曲された。ダラニーは、偉大なヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムの遠縁で、高度な演奏技巧と情熱的な表現に定評があった。彼女が初演したピアノ伴奏版に続いて管弦楽伴奏版も作られ、こちらはポーランド出身のサミュエル・ドゥシュキンの独奏で初演された。

ツィガーヌとはフランス語で「ジプシー(ロマ)」を意味する。チャルダッシュの形式に基づき、緩急の二つの部分から成る。前半は、哀愁を帯び、決然としたヴァイオリンのカデンツァで始まる。ハーブの先導でオーケストラが登場し、後半は、多彩な演奏技巧が披露され、激しさと力強さを増して華麗に盛り上がる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

【タイスの瞑想曲】作曲：1892~94年(オペラ全曲)／初演：1894年3月16日、パリ(オペラ初演)／演奏時間：約5分 楽器編成／フルート2、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、ティンパニ、ハーブ、弦五部、独奏ヴァイオリン

【ツィガーヌ】作曲：1924年／初演：1924年4月26日、ロンドン(ピアノ伴奏版)、1924年10月19日、アムステルダム(管弦楽伴奏版)／演奏時間：約10分 楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット、打楽器(サスペンデッド・シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール)、ハーブ、チェレスタ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ドビュッシー 交響詩〈海〉

フランスの作曲家クロード・ドビュッシー (1862~1918) の名声は、歌劇〈ペレアスとメリザンド〉(1902年初演)の成功によって確かなものとなった。創作意欲も高まり、翌年の夏には二つの作品を同時進行で手がけるほどだった。そのひとつ、交響詩「海」について、ドビュッシーは、〈ペレアス〉を指揮したメサジュに宛てた手紙に次のように記している。「私は3つの交響的スケッチに取りかかっています。I. サンギネール諸島の美しい海、II. 波の戯れ、III. 風が海を躍らせる。全体のタイトルは『海』です」(1903年9月12日)。当時、私生活は穏やかではなかったが、作曲は粛々と進められ、1905年に一部タイトルを変更して完成した。同年7月に出版された初版楽譜の表紙には、葛飾北斎の版画「富嶽三十六景」から「神奈川沖浪裏」の波の意匠が使われた。20世紀以降の音楽の指針となる作品であるが、複雑で洗練されたリズムのポリフォニーや斬新な響きゆえに、初演当時の評価はまちまちで、すぐには理解されなかった。

第1楽章 「海の夜明けから真昼まで」(非常にゆっくりと) 序奏は低音から静かな響きが立ち上がり、トランペットとイングリッシュ・ホルンによる主題が現れる。「非常に柔軟なリズムで」と指示された主部は、五音音階や教会旋法に基づく音階が用いられ、音楽は明るくダイナミックに広がる。

第2楽章 「波の戯れ」(アレグロ) フルートとオーボエの柔らかな音色が浮かぶ8小節の導入に続き、主部はイングリッシュ・ホルンでしなやかな旋律が示され、弦楽器の印象的な長いトリルなど、派生した旋律が次々と現れ、表情を変化させる。

第3楽章 「風と海との対話」(快活にそして激しく) ティンパニと大太鼓のトレモロを背景に低音弦楽器のリズム動機が示され、やがて第1楽章の序奏の主題がトランペットで2度奏される。第1楽章主部の主題が回帰され、新たな主題も交えて盛り上がり、最後は祝祭的な高まりを見せながら、長三和音で力強く結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1903~05年／初演：1905年10月15日、パリ／演奏時間：約23分 楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、ホルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、銅鑼)、ハーブ2、弦五部

ショパン

ピアノ協奏曲 第2番 へ短調 作品21

数々のピアノ曲で知られるフレデリック・フランソワ・ショパン(1810~49)だが、ピアノ協奏曲は母国ポーランドで活動していた初期に書かれた2曲だけしかない。2曲ともピアノスティックな技巧を生かしつつ、ロマン的な感情性と民俗的語法に基づくポーランド的性格を打ち出した彼らしい作品となっている。

2曲のうち本日の第2番は、第1番に先立って1829年秋から翌年初めにかけて書かれている(番号が後になったのは出版が遅れたため)。ショパンは29年の春頃からワルシャワ音楽院声楽科の学生コンスタンツィア・グワドコフスカに片思いしていたが、この作品にそうした青春の多感な感情が反映されていることは、友人宛の手紙で、彼女を想いながらこの曲の緩徐楽章を書いたと述べていることから明らかだ。そうした青春の心情の揺れと情感の豊かさはピアノの名技的な多彩な表現力に見事に結び付けられ、初めて協奏曲に挑戦したとは思えない充実した作品として結実している。自身の独奏で行われた初演は大成功を収めた。

第1楽章 マエストーソ 暗い表情を秘めた第1主題と優美な第2主題を持つ協奏的ソナタ形式で、管弦楽提示部の後、ピアノが両手ユニゾンの下行パッセージで登場する。

第2楽章 ラルゲット 情感豊かな緩徐楽章。ロマン的な憧れを感じさせる主部に対し、中間部では恋の不安を表現するかのように、弦のトレモロ口上でピアノが劇的なモノローグをレチタティーヴォ風に語る。

第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ 民俗舞曲のマズルカ風の主題を中心に繰り広げられるフィナーレ。躍動的な副主題では伴奏の弦楽パートがコロ・レーニョ(弓の木の部分で弦を叩いて演奏する奏法)で民俗舞踏風の効果を作り出す。最後はホルンの呼びかけに始まる長調のコーダで華麗に締め括られる。

(寺西基之 音楽評論家)

作曲：1829~30年／初演：1830年3月17日、ワルシャワ／演奏時間：約32分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ショスタコーヴィチ 交響曲 第11番 ト短調 作品103 (1905年)

旧ソ連の大作曲家ドミトリー・ショスタコーヴィチ(1906~75)が、社会主義リアリズムに沿った作風を強要する当局と、自身の芸術家としての意思の狭間^{はざま}にあっ
てしばしば作品の表と裏に異なる意味を持たせたことはよく知られている。1957
年の十月革命40周年記念のために前年から作曲が進められた交響曲第11番は、
(1905年)という題のとおり表向きは1905年のペテルブルクでの「血の日曜日
事件」を描いた標題作品だ。この事件は改革を求める民衆10数万人が行ったニコ
ライ2世の冬宮への大行進に対して軍隊が発砲、大惨事となった動乱で、ロシア
革命の端緒となった。ショスタコーヴィチはこの作品で、数々の革命歌(日本でもか
つて労働運動で歌われた〈ワルシャワ労働歌〉〈同志は倒れぬ〉を含む)を引用しつ
つ、それぞれ標題を持つ4つの連続する楽章を通じて迫真的にこの事件を描写し
ており、その点で表向きは当局の意^{かな}に適った作品となっている。

しかし近年、この作品の裏に込められた作曲者の真意が様々に論じられている。
そのひとつが1905年の動乱の描写を通して1956年のハンガリー動乱、すなわち
ハンガリー民衆の反乱とソ連軍による鎮圧の悲劇を描いたとする見方である。こ
れに対しては、曲の構想がハンガリー動乱前になされていることを理由に否定す
る意見もあるが、そうだとすると、ハンガリー動乱^{てんまつ}の顛末と「血の日曜日事件」の
類似した状況に対して彼が抱いた思いが、作曲中の交響曲に反映されたことは充
分あり得よう。またこの交響曲で描かれた民衆の抗議を権力が弾圧するという内
容は、帝政同様に民衆を弾圧するソ連当局への当てつけと見ることもできる。

いずれにせよ体裁上は体制寄りにみえるこの交響曲は、初演の成功に続いて翌
1958年のレーニン賞を受賞するなど、当局から歓迎された。ショスタコーヴィチ
はどういう思いでそうした評価を受けとめたのだろうか。

第1楽章 宮殿前広場 アダージョ 静かな緊張のうちに^{しいた}虐げられた民衆を描い
た楽章で、まず弦が不気味に静まり返る宮殿前の情景を描く。そこに聴こえるテ
ィンパニの不気味なリズムと軍隊ラッパ。やがてフルートが囚人の生活を歌う革
命歌〈聞け!〉を示す。これらが繰り返し扱われた後、低弦に革命歌(囚人歌)の〈夜
は暗い〉が現れる。

第2楽章 1月9日 アレグロ 「血の日曜日事件」の惨劇を描く楽章。自作の合
唱曲集〈革命詩人の詩による10の詩曲〉の第6曲〈1月9日〉から引用された皇帝
への請願の主題(おお我が父、皇帝よ)によって王宮への行進が不安な緊張の
うちに描かれ、さらに同じ合唱曲からの主題〈帽子を脱ごう〉(全曲中特に重要な
主題)が哀訴するように金管に現れる。膨れ上がる民衆の行進を示すように大き
く盛り上がった後、一時の静けさが描かれる。しかし遂に軍隊の進攻(フガート)
が始まり、大虐殺が管弦楽^{ほうちょう}の咆哮のうちに描かれる。最後は犠牲者の遺体の転が
る広場の静寂(おののくような弦のトレモロが伴う)だけが残る。

第3楽章 永遠の記憶 アダージョ ヴィオラに現れる有名な革命歌〈同志は倒
れぬ〉による犠牲者への葬送曲。中間部ではヴァイオリンが革命歌〈こんにちは、
自由よ〉を歌い始めて感情を高め、頂点で前出の〈帽子を脱ごう〉^{どうこく}が慟哭^{どうこく}のよう
に現れる。

第4楽章 警鐘 アレグロ・ノン・トロツポ 管楽器の奏する革命歌〈圧政者らよ、
激怒せよ〉が激しい抵抗運動に立ち上がる民衆を描く。やがて〈ワルシャワ労働歌〉
に基づく行進曲となり、スヴィリドフのオペレッタ〈ともしび〉の一節(労働者の行
進場面)が引用され、さらに既出の諸主題が現れる中、大きな高揚を作り上げて
いく。やがて宮殿前の静けさが回帰、その中でイングリッシュ・ホルンが〈帽子を
脱ごう〉を悲しげに奏するのが印象的だ。最後はこれからも続く悲劇と混乱を暗
示するコーダで全曲を閉じる。

〈寺西基之 音楽評論家〉

作曲：1956~57年/初演：1957年10月30日、モスクワ/演奏時間：約55分
楽器編成/フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット3(バスク
ラリネット持替)、ファゴット3(コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チュ
ーバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、シロフ
オン、銅鑼、鐘)、ハーブ2、チェレスタ、弦五部

ボロディン

歌劇〈イーゴリ公〉から“だったん人の踊り”

有機化学でカルボン酸銀塩からハロゲン化アルキルを得る反応をハンスディーカー反応、またはボロディン反応と呼ぶ。この反応の発見者ボロディンとは、ロシアの作曲家アレクサンドル・ボロディン（1833～87）にほかならない。少年期より音楽の才能を示したボロディンだが、化学にも魅了され、大学で医学と化学を学び、博士号を取得して研究に打ち込んだ。しかし、化学者として名を成した後も、ボロディンが音楽への情熱を失うことはなかった。バラキレフとの出会いを機に交響曲第1番を書き上げ、やがてその関心はオペラへと向かう。

ボロディンの心をとらえたのは12世紀の散文叙事詩「イーゴリ軍記」。1869年、ボロディンはひと夏を資料集めと文献研究に費やした後、作曲に取り組む。作曲はいったん中断され、1874年暮れ頃ふたたび筆を進め、翌年〈だったん人の踊り〉などいくつかの部分が書かれた。だが、自らの研究に加えて学生の指導、さらには女子医学校の財務まで任され、ボロディンは激務に追われる。以後、長期にわたって断続的に作曲が続けられたものの、1887年に作曲者が急逝したため、オペラ〈イーゴリ公〉は未完のままに終わってしまう。ボロディン存命中より〈イーゴリ公〉の個々の曲を演奏会でとりあげていたリムスキー＝コルサコフが、グラスノフとともに〈イーゴリ公〉を補筆完成した。

歌劇〈イーゴリ公〉で描かれるのは遊牧民ポロヴェツ人と、戦う愛国の士イーゴリ公の物語。戦いに敗れ囚われの身となったイーゴリ公に対して、ポロヴェツ人の長コンチャークは宴を催す。ここで奏でられるのが〈だったん人の踊り〉。敵とはいえ敬意を持って接するのがコンチャークの流儀なのだ。郷愁を誘う曲想で始まり、軽快な舞曲、荒々しい賛歌などを経て、熱狂的な幕切れを迎える。本来なら「ポロヴェツ人の踊り」と呼ぶべきだが、日本ではこの訳題が定着している。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1875～79年／初演：1879年3月11日、 Санктベテルブルク／演奏時間：約14分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール）、ハープ、弦五部

プロコフィエフ

ピアノ協奏曲 第2番 ト短調 作品16

「これが、わたしが心から願っていた生徒だ！」

ペテルブルク音楽院で入学試験官長を務めていたリムスキー＝コルサコフは、「四つのオペラ、二つのソナタ、交響曲とたくさんのピアノ曲が入った二つの大きなフォルダー」を抱えて入ってきたセルゲイ・プロコフィエフ（1891～1953）を目にして、思わずこう叫んだ。

プロコフィエフは、リムスキー＝コルサコフから管弦楽法を習ったものの、「授業からなにも学ぶものはなかった」と後に振り返っている。急進的な作風を模索する野心家プロコフィエフは、音楽院在学中にこのピアノ協奏曲第2番を作曲し、自身のピアノ独奏による初演で賛否両論の大騒動を巻き起こすこととなった。新聞にはこんな記事が掲載された。

「舞台にはペテルブルクの学生らしき若者があらわれた。ピアノの前に座り、鍵盤のほこりを払っているのか、もしくは鋭くドライなタッチでめちゃくちゃに叩いているのか、どちらかだった。聴衆はどう判断すべきか、さっぱりわからなかった……」

ただし、当時の楽譜は革命騒ぎのなかで失われ、1923年に記憶をもとに復元した改訂版が現代に伝えられている。

プロコフィエフによれば、協奏曲には主に二つのタイプがあるという。一つはソロとオーケストラがよく溶け合っているが、演奏者にはあまりおもしろくないもの（例としてリムスキー＝コルサコフのピアノ協奏曲）。もう一つはソロはすばらしいがオーケストラが単なる伴奏に終わってしまっているもの（具体例はショパン）。自身のピアノ協奏曲第2番は後者に属するというのが、はたしてどうだろうか。

第1楽章 アンダンティーノ 物憂げな第1主題とユーモラスな第2主題によって組み立てられる。**第2楽章** スケルツォ、ヴィヴァーチェ トッカータ風の音楽が突進する。**第3楽章** 間奏曲、アレグロ・モデラート 重々しさのなかに冷ややかなユーモアが漂う。**第4楽章** アレグロ・テンペストー エネルギッシュで爆発的なフィナーレ。急速なコーダは熱風のように。 〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1912～13年、1923年改訂／初演：1913年9月5日、パヴロフスク／演奏時間：約31分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、タンブリン）、弦五部、独奏ピアノ

プロコフィエフ バレエ音楽〈ロミオとジュリエット〉から

セルゲイ・プロコフィエフがバレエ〈ロミオとジュリエット〉のために、演出家ラドロフ、振付師ラヴロフスキー、劇作家ピオトロフスキーとともに練りあげた台本は、当初、ハッピーエンドで終わっていたという。理由は「生者は踊れるが、死者は踊れない」という振付上の都合だった。ところが、この話が作曲中に知られると物議をかました。結局、振付師たちと相談の上、原作に従った筋書きに改められることになった。

プロコフィエフはバレエ全曲から、まず二つの組曲を編んだ。バレエの初演が遅れたため、これらの組曲は先立って初演されている。後年、第3組曲が作られた。三つの組曲のなかでは、有名な“モンタギュー家とキャピュレット家”を含む第2組曲の演奏頻度が高いが、公演ごとに独自の抜粋によって演奏されることも多い。今回演奏されるのは三つの組曲から選ばれた8曲。バレエ版の順序にこだわることなく、主要な楽曲が並べられている。

“モンタギュー家とキャピュレット家” 第2組曲 第1曲

金管楽器の弱音が曙光のようにあらわれ、すぐにクレッシェンドして荒々しい不協和音で咆哮する。バレエ版では「大公の宣言」にて、大公が「ヴェローナの平和を乱す者は死刑に処す」と警告する場面に相当する。すぐにバレエ版で「騎士の踊り」と呼ばれる威圧感のある舞曲が続く。

“少女ジュリエット” 第2組曲 第2曲

活発にはしゃぎまわる少女ジュリエットの姿が描かれる。やがてフルートのたおやかな主題が恋への憧れと不安を表す。母親がジュリエットにパリスとの結婚を承諾するように求めるが、ジュリエットは「まだ自分は子供だから」と断って、当惑する。原作の設定ではジュリエットは13歳である。

“修道士ローレンス” 第2組曲 第3曲

ゆったりとして慈愛に満ちた修道士ローレンスの音楽。ロミオはローレンスにジュリエットへの愛を打ち明け、結婚式を挙げてくれるように懇願する。ローレンスは若いふたりの結婚が対立する両家に和解をもたらすことを期待する。

“踊り” 第2組曲 第4曲

バレエ版では第2幕の「五組の踊り」。謝肉祭で五組のカップルが踊る。オーボエが軽やかな主題を奏でる。リズムカルでコミカルな曲想だが、わずかに焦燥感を漂わせる。

“別れの前のロミオとジュリエット” 第2組曲 第5曲

フルートの冴え冴えとした主題が奏でられ、ロミオと一夜をともにしたジュリエットの心情を表現する。修道士ローレンスのもとで密かに結婚式を挙げたふたりが愛を確かめ合う。後半では決然としたホルンがロミオの運命に立ち向かう覚悟を表す。

“ジュリエットの墓の前のロミオ” 第2組曲 第7曲

ジュリエットは死んでいる……いや、本当は死んではないのだ。ローレンスの策により仮死の薬を飲んだまで。しかし、ロミオは策を知らず、横たわるジュリエットの姿を目にして悲しみに打ち震える。悲痛な哀歌が奏でられ頂点に達すると、絶望したロミオが死の毒をあおる。最後は静かにジュリエットを回想して曲を閉じる。

“仮面” 第1組曲 第5曲

友人マキューシオはロミオらを誘って、仮面で変装して宿敵キャピュレット家の舞踏会に忍び込む。この気まぐれが悲劇の発端となるうとは……。

“ティボルトの死” 第1組曲 第7曲

決闘の場面。好戦的なティボルトの性格を表すような獷猛な主題で始まる。ティボルトとマキューシオが剣を交える。マキューシオが倒れ、ロミオは復讐のために剣をとる。激しい剣の応酬の末にロミオはティボルトを刺す。鈍い強音連打がティボルトの絶命を示唆する。吊いと嘆き、憎しみの音楽で締めくくられる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1934～35年／初演：[バレエ] 1938年12月30日、ブルノ劇場、チェコ、[第1組曲] 1936年11月24日、モスクワ、[第2組曲] 1937年4月15日、レニングラード、[第3組曲] 1946年3月8日、モスクワ／演奏時間：約36分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、テナー・サクソフォン、ホルン4、トランペット2、コルネット、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、タンブリン、グロッケンシュピール、シロフォン）、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦五部